

# 内水面資源活用高度化研究事業

勝田孝司・羽生和弘

## 目的

アユは漁業や遊漁の対象としてだけでなく、河川流域の山村地区の食材や観光資源として、重要な魚種となっている。しかし、近年の県内におけるアユの漁獲量は、ピーク時の1980年代の約600トンから大きく減少しており、アユ資源は危機的状況にある。

アユ資源が減少した主な原因として、河川環境の変化、冷水病の蔓延、カワウなどによる被害と考えられている。また、近年遊漁者の減少が続き、遊漁料収入が減少することで漁協の経営が厳しくなっている。

本研究では、冷水病の発生状況の把握とカワウ被害軽減対策の情報収集と提供、遊漁者ニーズの把握調査及び餌料環境形成に必要な諸条件の検証を行った。

## 方法

### 1 冷水病の発生状況把握

本県ではアユの防疫対策として、県内でアユの放流を行った漁協に対し、放流した種苗の由来、冷水病の履歴、輸送、放流までの水温状況等を記録した「あゆ種苗来歴カード」（以下、来歴カード）の提出を依頼している。

令和元年度に提出された来歴カードのデータを整理・解析することにより、冷水病の発生状況を把握するとともに、被害軽減対策について検討した。

### 2 カワウによる被害軽減対策

漁業者によるカワウ被害軽減のための活動を支援するため、全国のカワウ駆除および被害防止対策の先進事例を調査し、漁業者に対して情報提供を行った。

### 3 遊漁者ニーズの把握調査

減少が続いている遊漁者を増加させる対策の参考とするため、遊漁者が求める漁場等へのニーズについて聞き取り調査を行った。

### 4 餌料環境形成に必要な諸条件の把握調査

アユの餌料である付着珪藻は、大雨により流量が増加すると、石の表面から流出、流量の減少に伴い再生する。

県内の河川で、水温や付着珪藻の状況を調査した。その再生に大きく影響すると考えられる水温や降水量などの諸条件との関係を調べた。

## 結果および考察

### 1 冷水病の発生状況把握

来歴カードはアユを放流した17漁協から、84放流群

について提出があった。

来歴カードの情報から、解禁後1ヶ月後の状況として「冷水病が発生して不漁」という報告が1放流群あった。

冷水病予防対策として、放流時に与えるストレスを軽減するためには、輸送時と河川との水温差をなるべく小さくすることは重要であり、水温差が5℃以上になると、アユにとって危険といわれている。

来歴カードから、輸送時と河川の水温が記載されている放流群の72%で温度差は3℃以内となっており、近年の実績（H30年79%、H29年約9割）より低下していた。

そこで3℃を超えた放流事例について、放流直前の天候を確認したところ、降雨や夏日が認められ、それによる一時的な水温の変動があったことが原因と推測された。なお、5℃を超えた水温差での放流は報告されていない。

また、「冷水病は発生していないが不漁」との報告も14放流群あった。その内訳は、漁協の全ての放流群が該当したものが3漁協（8放流群）、一部の放流群が該当したものが2漁協（6放流群）であった。後者は同一日放流群でも好漁・不漁が分かれていることから、放流場所（支流）の差によると推測された。

### 2 カワウの被害軽減対策

令和元年12月に開催された内水面漁連研修会において、水産研究・教育機構中央水産研究所等から情報収集した被害防止対策や直近のカワウ生息状況等について説明した。また、カワウ以外にも冷水病の対策状況や全国的な課題として、カワシオグサの繁茂や外来珪藻のミズワタクチビルケイソウの分布拡大について情報提供した。

漁協からは、疑わしい藻類を見つけた場合の判別について要望があった。

### 3 遊漁者ニーズの把握調査

当初はアンケート用紙を配布・回収することを計画していたが、より詳しくニーズを把握するために、設問形式での聞き取り調査に変更した。

9月15日、県内のアユ漁場にて14名の遊漁者から聞き取りを行った。

聞き取り項目は、「移動時間の上限」「釣り場を選ぶ理由（情報源）」「放流種苗の考え方」「帰路の寄り道」「あれば良い情報・釣り場や漁協へ要望」である。

回答者は、約8割が県内に住所を有し、釣り歴20年以上のベテランで、7割が60歳以上であった。

釣り場への移動時間（片道）の上限では、「2時間以

